石川淳選集

第二卷

石川淳選集　第2巻（全17巻）

1979年12月7日　第1刷発行©

¥1300

著　者　石川　淳（いしかわ　じゅん）

発行者　緑川　亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社　岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

白描　五
かよひ小町　二五
處女懷胎　二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小說

二

白

描

一

夕方の六時近く、まだ剛情に照りつける眞夏の日の下に、屋根も塀も植込もぎらぎらと黄ろく溶ろけて見える家家の門口をのぞいては、略描の地圖と引きくらべながら、一人の少年が淀橋柏木の裏道を歩いてゐた。襟の開いたシャツに、古い、だぶだぶの、しかし品のよささうなホームスパンの背廣を著こんで、角の擦りはげた赤革の鞄をさげ、肩をゆり上げて歩いてゆくところはおとなびた風態であつたが、そのおとなの型にいそいで釣合はうとあせつてゐる肉體の脂の中には未熟な果實のにほひが殘り、骨骼の定まらぬ手足のひよろ長さ、蒼みがかつた皮膚の艶、柔軟な呼吸の調子が十九歳を計算してゐた。道の兩側の家並はみな百坪どまりの住宅で、和洋とりどりながら無趣味なことではいづれもおなじ扁平な表がまへをさらし、遠くからは見分のつかぬけしきの中に、やや小さい一軒、煤けた板塀に黑木の門のゆがんだのが、門柱に横文字の名刺を二枚貼りつけ、横文字のそばにをかしな字體のペン字で「アルダノフ」「リイビナ」と書き入れてある、その家の前まで來たとき、少年は名札を見据ゑて、急に立ちどまり、鞄を地べたに置き、半麻の帽子を取つて額に流れる汗を拭きながら、ほつと息をついた。

門はあいてゐたが、内はすぐ低い竹垣に仕切られ、それに沿つてななめに三四間踏石の敷いてある向うが西洋風の玄關で、大きい板扉が締まり、玄關の上の屋根には二階のバルコンが突き出て、何式ともつかぬ木造ペンキ塗の色褪せてはゐるものの、骨組太くどつしりした建物がそこにあつた。少年は門の前で噴き出し

て來た汗の始末に當惑したのか、あるひはこれから訪ねる人物に逢ふ前にまづ横文字の名札に對してはにかんだのか、ハンカチーフで顔を撫でまはしてゐたが、やがてそれをかくしに丸めこみ、上著のぼたんを掛け、鞄を取り上げて、中にはひつて行つた。玄關の扉を二三度がたがたと搖つたがあかないので、見るとつい横手の壁にベルがあるのに、ひとりでまごついてベルを押すと、ぢきに扉がなかばあいて、浴衣にメリンスの赤い帶、割烹著をきた、これは女中らしく、低い鼻をのぞかせたのが、「どなたです。」「ぼく、鼓……鼓金吾つていふんです、澁谷の中條さんのところから來たんです。これ手紙です。」少年は一息にさういつて、内がくしに入れて來た封筒をさし出した。

玄關の正面は廊下で臺所へ通じ、右は壁、左は硝子戸の附いてゐる日本式の縁側、それが數間つづいた突き當りは板戸の押入で、その鴨居の上に何やら横書した額がかけられ、額の下から右に切れて階段があり、縁側に面した二部屋は粗末な絨毯を敷いた洋室で、臺所寄りの一室にはベッドとデスク、他の一室には大きい長方形のテイブルが据ゑてあるほか何の裝飾もなく、普通よりも幅の廣いその縁側には應接間風に籐の茶卓と椅子が置かれて、今三人の人物がそこで茶を飲んでゐたが、女中の取次いだ手紙を受け取ると、肌著地のやうな縞のワンピースをきた眼の蒼い小柄な婦人が立ち上つて玄關に出て來た。年はまだ五十前かも知れないが、手足も眼鼻だちも總じて小さく、化粧しない顔は艶うせてしなび、とりわけ無雜做に束ねた薄茶色の髪の日向にふはふは浮くのが白髪のやうに見えるせゐもあらう、むしろ日本の老女に似たそのからだつきをもつてして、これはやはりヨーロッパ人のいはゆるオリヤンタルすなはちロシヤ人の顔で、婦人は縮小されたロシヤ女の型よりほかのものではなかつた。そして

東京にもかなり住みなれてゐるらしく、達者ではないがアクセントの棘だたぬ日本語で、「あなた、ツヅミさん。さうですか。チウジョウさんから聞いてゐます。お上りなさい。」金吾のはうでは、じつはここまで來る途中初對面の挨拶のために頭の中でおぼつかない英語の單語を組み上げておいたのだが、相手の調子のなめらかさに用意されたことばが戸惑ひして、ただ、はあ、はあとおじぎするばかりであつた。

あたへられた縁側の椅子の一つに、金吾は硬くなつて坐つた。リイピナ夫人であるその婦人のほかに、二人の人物は男であつた。一人は夫人が「マイ、ハズバンド」といつて紹介したアルダノフで、これはたしかに夫人よりも年下であらう、見るからにスラヴ系らしい六尺近い壯漢で、角ばつた顔の、廣い額に眉毛が薄くぼけ、その下に灰色の大きい眼が鈍い光を湛へ、どこに視線をとめてゐるとも知れぬ茫とした様子であつたが、ポロシャツの袖から突き出た頑丈な腕を組みながら、顔の筋一つうごかさずときどきぽつりとものをいふ聲は夫人のそれに比して逆に女のやうにやさしく、日本語に英語をまぜて、しぜん默りがちの金吾にはなしの仲間入をさせようと仕向けるふうであつた。もう一人は……もし一口にいはうとすれば、それは見たところ世間にざらにゐるやうな中老人の一人だといふほかあるまい。白ポプリンのホワイト・シャツの中で痩せてゐる猫背の上體を籐椅子に沈め、洗ひざらしのリンネルのずぼんをはいた長い脚をきちんと折り曲げ、額が拔け上り頤がほそく尖つてはゐるが健康さうな日燒の色を皮膚にしみつかせて、國籍の識別もつけがたいその中老の人物は鐵縁の眼鏡の下に蒼みの濃い柔和な瞳で微笑しながら、ひとびとの會話の外にふはりとおちついて、前に置かれた紅茶の碗とジャムの皿にもあまり手をつけずに、ゆつくりパットをすひこみ、や

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

うやく黄昏に染まりかかつて來た庭、片隅に笹がかたまつてゐるだけで風情もなく荒れ乾いてゐる庭の面を眺めてゐた。だが、かりにたれかが一度この煙のやうな人物の顔を見た後往來ですれちがふ他のひとたちの面相に注意したとすれば、それが決して世間にざらにあるやうな顔ではないといふことに氣がつき、しかもふたたび見定めようとするとその顔のどこが別誂へなのか空に消えてしまふことの不思議さにぞくりとするであらう。げんに今、金吾はぼんやりその人物を見つつ、そこにたれがゐるのかほとんど氣にとめてゐなかつた。すると突然、金吾の茶碗に茶をつぎたしてゐたリイピナ夫人がさりげなく眼でさして「クラウスさんです」とささやいた。とたんに、金吾はあやふく「あつ」とさけんで飛び立ちさうになり、兩手で卓につかまつて卓上にあるものをがちやんと鳴らした。金吾が獨りぎめに興奮しながら、そのひとの弟子になりたい希望に搖られて來たところの、名譽ある世界的建築家クラウス博士がつい鼻先にゐたではないか……しかし、いつたいこの少年がどうしてこの場所にあらはれるはこびになつたのか、事のあらましを記しておかなければなるまい。

本所の石原に鼓勘吉といふ椅子職人がゐた。女房に死なれた後男の子一人を相手に、狹い裏長屋の二階をねぐらにして、階下を仕事場にあて、ときどき日本橋の家具問屋へ出かけて行くほかにはいつも薄暗い土間の中で木屑に埋もれ、小さいからだを眼まぐるしくうごかしてゐるところは板を嚙つてゐる虫のやうで、もし椅子といふものがなかつたとしたらばたしかにこの人物が此世に生れ合はせることはなかつたであらう。勘吉の亡父は體骼もずつと大きく、一代で相當な材木屋の店を仕上げたほどのやりてであつたが、その亡父

の父親は反對にからだも料簡も虚弱な生れつきで、維新の大波に揉みつぶされて、これはまた太つ腹であつた先代の築いた財産を水の泡にしてしまつた男で、かうして系圖を遡つて行くと何代か前に次郎太夫といふのがゐた。これは小身ながら武家で、江戸青山邊に住んでゐたが、引込思案の性質で格別の才覺はなかつたもののただ鐵砲に巧みでかなりの手練があつた。ところで、次郎太夫がある賣女に迷ひ、身分不相應の金錢をつぎこんだ末に欺されたと知つて赫と逆上し、つい鐵砲で女を擊つてしまつたといふ事件がおこつた。幕府の掟では賣女殺しよりも江戸府内に於ける發砲のはうが重大で、そのとき偶然銃口が城の方角に向けられてゐたために罪さらに重く、次郎太夫は斬首に處せられた。扶持に離れたその子孫は町人となつてほそぼそつづいて來たのだが、次郎太夫のうちに共棲した引込思案と逆上性が二つに分れ、こもごも隔世的に鼓の家の血統に引き繼がれて、いはば貧血派と多血派が一代おきにあらはれ、それにつれて體骼もあるひは大きくあるひは小さく、今勘吉にあつてはたまたま貧血派の代で、露地の奥の仕事場にちぢまり、他人が腰かけるであらう椅子の脚にしがみついてゐる有様で、そして勘吉の息子の少年にあつては逆に父親よりも大柄なその肉體がやがて椅子の枠にはまりきりさうもない兆候を呈してゐた。しかし少年は決して家の業をきらつてゐたわけではなく、それどころか夜學の商業學校に通ひながら晝間は父親の仕事場で手傳ひをしてゐたのだが、板を削ることからはじめて椅子の飾り彫をするまでに進み、いつかその飾り彫が少年の受持のやうになつて、板切に幾何模様の刮拔をしたり唐草模様の浮彫をしたりする仕事に當人も愉しげに打ちこみ、すでに父親をしのぐ出來榮を示すに至つた。父親のはうでは、だいたい息子の教育には無頓著なたちで、夜學に通は

せたのも漠然とどこかの店員にでもするつもりらしかつたのだが、少年はその商業學校での課目のうち肝腎の十露盤をおこたり、もつぱら英語に夢中であつたのは椅子の裝飾のやうに何となくはいからなもので自分を飾らうとする願望であつたらうか。さて十九歳となつて夜學校を卒業した今日、少年のたましひがうろついてゐる場所はやはり確實な技術を身につけたところの仕事場で、ただし椅子ではなく椅子の飾り彫がもう單なる飾であることをやめ、木片の中に美しい夢を祕めた獨立の意味を現前し、さうだ、彫刻こそ自分のえらぶべき仕事なのだと少年はひそかに決心しつつ、それにしてもおのれの名の金吉といふのが椅子作りにしか似合はしくない呼名のやうに思はれ、勝手に吉を吾と改めて、そのほうが美術家的だとひとり合點した。かうして今われわれは少年木彫家鼓金吾を知つたことになる。

一方、勘吉の椅子を買ふ顧客に中條兵作といふものがゐた。澁谷松濤にある大きい持家に住んでぼんやりくらしてゐるこの四十四五歳の人物は生れたときから今のままの年配で現在の生活の中にぬうと懐手をして出て來たといふふうで、もし他の環境に置かれたとしたらば水氣を帶びてふくれたその顏がどんなかたちになるかたれも想像しかねるであらう。兵作の亡父は本名よりも神戸の鬼兵で通つた高利貸で、金錢に對する度はづれの執著に自分では氣がつく隙もなかつたほど典型的な守錢奴として傳へられてゐるが、兵作が亡父と似てゐるところは腹わたにしみこんだ吝嗇の本性で、そして亡父と似てゐないところはその本性を平然と剝き出しのまま押し通す代りに一應寛大らしくよそほふ技巧を心得てゐることであつた。この見せかけの元はおそらく世評の鞭がひびくところの亡父の影から拔け出ようとする足掻にはじまつたものか、げんに神戸か

ら東京に引き移つて來たのもそのためで、かたがた危險を避けるために金融の仕事は一切打切にして鬼兵の子とひとにさとられることさへ畏れはばかり、どぜうが沼の泥を立てるやうに系圖をぼかしつつ、しかも巨額の遺産は綿密な注意でわが手に守り、ほとんど何も持つてゐないかのごとく堅くにぎりしめ、ときどき當人みづからそれほど多くを祕めてゐることにぎよつとするくらゐであつた。しかし、その財産がすくなからぬ上りを浮ばせてゐたためか、兵作は毎月負擔といふにたりぬ一定の額を別に銀行に積み立て、今は數十萬圓に達してゐるその口座の許すかぎりで、利益を宛にする必要もなくまた損をしても苦痛でないといふなまぬるさの中にある摸擬的な小事業をいとなみ、澁谷の家の單調な日常に堪へられなかつたせゐでもあらう、とくに銀座裏の貸事務所をえらんでそこを店とし、毎日午後から遊び半分に、そして同時にかなり熱心に通つてゐたが、さてその店といふのが表には「趣味の工藝品、便宜莊」と看板を掲げ、内にはひると……だが、係はり出すときりのないその顚末はしばらく措き、勘吉の椅子にもどらなければならぬ。

勘吉が仕事を納める日本橋の某家具店で、かつて便宜莊から椅子テイブルの註文を受けたことがあつた。それはざらにある事務用の品物で、すぐ出來合で間に合つた。するとその後兵作はぶらりと日本橋に來て、何を買ふともなく家具店の陳列場を見てまはり、店員の挨拶を無愛嬌に受け流しながら、近ごろの職人には昔氣質の腕のよいのはゐないだらうなどといひ、店員がそれを打消して勘吉の名をあげると、ふんといつた口調でかへつて相手の舌をあふり勘吉の住所をしやべらせてしまふと、もうそんなことは氣にもとめぬていで店を出て、ついその足で本所へ、勘吉の仕事場を訪ね、お召の二枚重ねを著たきんきんたる風采で鉋屑の

中にしやがみ、恐縮した勘吉にウェストミンスターをすすめ親しげにはなしこみ、註文があるから便宜莊へ來るやうにといつた。萬事これが兵作の流儀であつた。勘吉のはうでは、工藝家の保護者としか見えぬ兵作のとりなりに手もなく感じ入つて、翌日便宜莊に出むくと、まづ見せられたのがドイツの建築雜誌で、寫眞にあるやうな型の安樂椅子を一つ、これは他の工藝品とともに店に陳列するのださうで、外國人の客が多いことゆゑ細工は入念に、そして初めは委託のつもりで工賃はなるべく安く、もつとも實れ工合に依つては追つて色も附けよう、後の註文もあらうとの鷹揚な口ぶりに、勘吉は何度もおじぎをして引きさがり、やがて型通りの椅子を原價同樣の安値で納めると、それは便宜莊に陳列される代りに澁谷の中條邸に引き取られて、兵作の居間に据ゑられ、勘吉が內內宛にしたところの色附も後の註文も全然なかつた。しかし、さうとは知らぬ勘吉としては、自分の技能が初めて世間にみとめられたやうな氣がして、現實の取引計算よりも賴みがひありげな兵作とのつながりをばら色にぼかして眺め出してゐたが、その父親にもまして兵作に打ちこんでしまつたのは金吾であつた。美術愛好者であるこの富裕な紳士は勘吉から彫刻志望の少年のはなしを聞くとさつそく金吾を銀座に呼び出して、茶菓と激勵をあたへ、そのうへ他日の後援を約束するかのやうに五十錢銀貨數枚をくれたではないか。それはちようど夏近いころで、兵作は茶のジャーヂの背廣に白の網目の手袋、籐のステッキをゆつたり突いて、無表情だが赭ら顏で大きい眼鼻だちの、ことに鉤形に盛り上つた肉の厚い鼻が外國人かとも見える樣子であつた。まつたくドイツ語專門の中學校から引きつづいて某私立大學のドイツ文科を出た兵作は文學はともかくドイツ語の會話だけは達者で、そのせゐか便宜莊に出入するのは多く外

國人、中には版畫や工藝品をもちこむ日本の美術家もゐて、しかもそのひとたちの生活を陰に援助でもしてゐるかと推せられるそぶりが少年を一そう感服させた。やがて、眞夏に入つたある日、兵作はまた金吾を呼んで、知合のロシヤ人の畫家夫妻が避暑に出かけるので、その柏木の留守宅に行つて暑中を過したらばどうか、すでに先方も承知してゐるし、外國人との附合に慣れるかたはら本所の裏町よりも涼しいに相違ないその家におちついて何か小さいものを彫つて見る氣はないか、出來榮に依つては銀座の店に飾つてもよいと、金吾が返事をする前に、もう五圓札一枚とホームスパンの古洋服がはひつてゐる角の禿げた鞄をさし出した。考へる餘地もなく突きつけられたこの過分の好意に、金吾は息づまつて、赫とほてるほどの興奮で口がきけなかつた。その日は七月三十日で、八月一日にアルダノフ、リイピナ夫妻が旅行に出るといふことのほかには、いつたい夫妻と兵作がどんな關係にあるのか、もちろん金吾は知らず、またきいてみようといふ思慮も浮ばなかつた。まして、親切らしくさういひわたしてしまふと兵作は金吾に見むきもせず立ち上つてぼんやり窓から日盛りの街を眺めてゐたこと、また兵作の吝嗇がどんなに根深いものにしろ五十錢銀貨とか五圓札一枚とか古洋服程度の金品はそれで恩にもきせうると同時につい氣まぐれに街路に投げ捨てても惜しくないものだといふことなど、金吾の注意がおよぶかぎりでなかつた。かうして翌三十一日、金吾が柏木の家を訪れたとき、リイピナ夫人宛の手紙には、少年には讀めないドイツ語で、「例の留守番の子供を參上させました。御遠慮なくお使ひ下さい。笑止なことには當人美術志望ださうです。なほ、御約束の畫、この夏休み中にお仕上げ下さることをお忘れなく。決して富裕でない小生にとつては家賃の問題も重要ですが、小生は何を犧牲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com